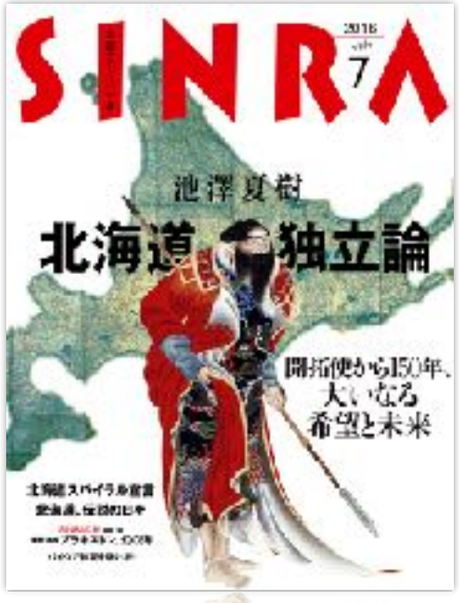
シンラの旅-12「津軽海峡」

ブラキストン、幻の海



エッセイ

芦原 伸

SINRA

CONTENTS

各見出しリンク

SINRA-1 2014.9
「小豆島」オリーブカントリー

SINRA-2 2014.11
「秋田」マタギの里へ

SINRA-3 2015.1
「富岡」富岡製糸場の歩き方

SINRA-4 2015.3
「北海道」北海道ワイン紀行

SINRA-5 2015.5
「小笠原」黒潮の孤島鵜来島漂流

SINRA-6 2015.7
「大台ケ原」熊野古道をいく

SINRA-7 2015.9
「信州木曽谷」森林鉄道が消えた日

SINRA-8 2015.11
「霊峰月山」死と再生の小宇宙

SINRA-9 2016.1
「丹後」古代王国と、絹をめぐる道

SINRA-10 2015.3
「秩父」絶滅危惧種再生へ、開ける道

SINRA-11 2016.5
「佐賀」大海を越えた胡蝶の夢

SINRA-12 2016.7
「津軽」ブラキストン幻の海

SINRA-13 2016.9
「五島列島」クジラたちの海

SINRA-14 2016.11
「飯田」天空の里、遠山郷

SINRA-15 2017.1
「北海道」ジンギスカンをめぐる冒険

SINRA-16 2017.3
「宮城県」猫たちの聖地

SINRA-17 2017.5
「京都」神が授けた、いのちの水

SINRA-18 2017.7
「熊楠」の森をめぐる冒険

SINRA-19 2017.9
「カナダ」極北の大地に生命が燃える

SINRA-20 2017.11
「宮崎」神楽仮面の謎を探る

ご購入 Fujisan.co.jp

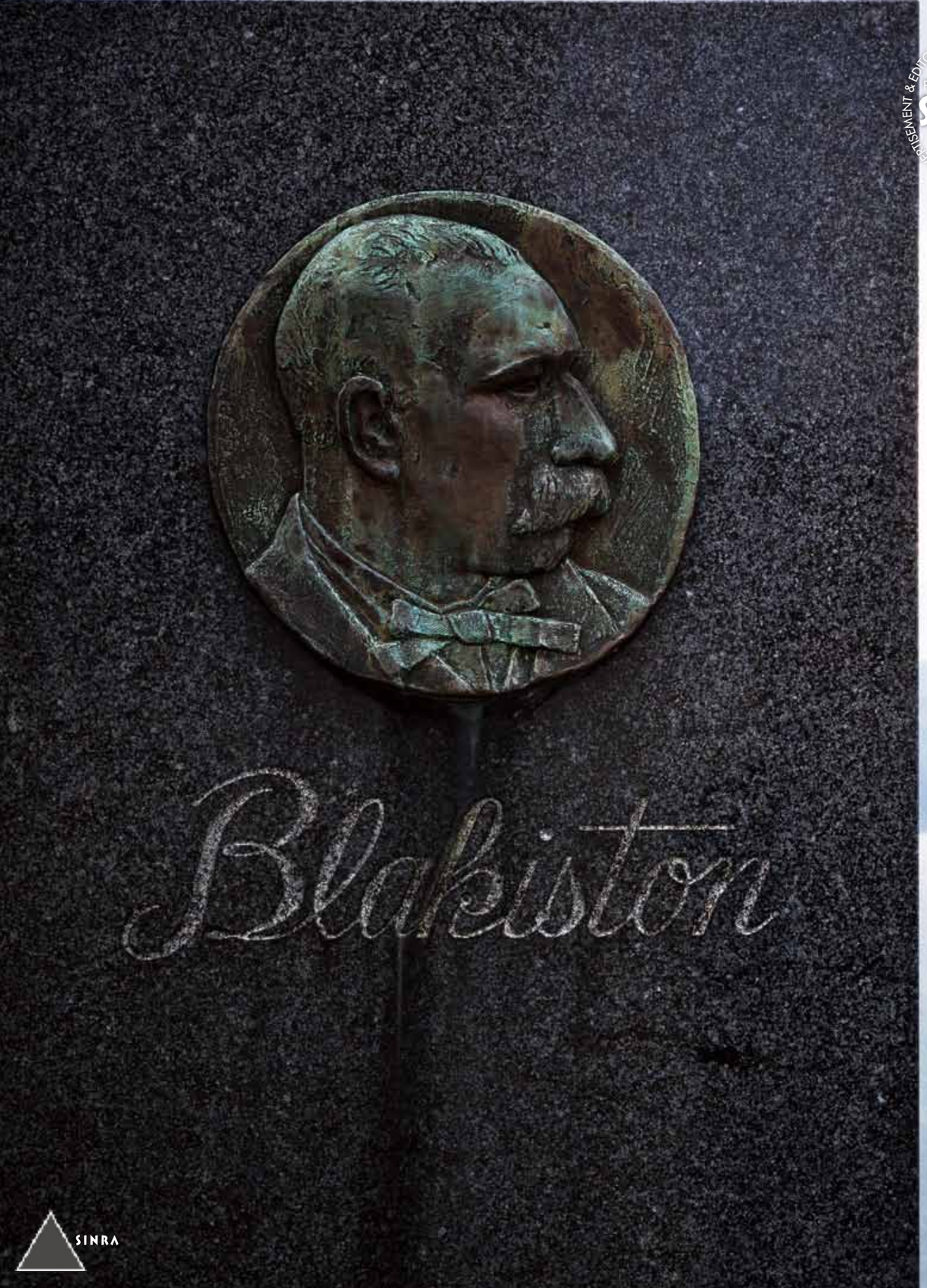
ご購入 amazon.co.jp プライム

ADVERTISEMENT & EDITORIAL TEMJIN PUBLICATION ADMINISTRATION
POSTED CERTIFICATE
SINRA
Approved by
天夢人

津軽海峡 ブラキストン、幻の海

トーマス・ライト・ブラキストンは幕末から明治初期の日本の激動期に、二十余年、函館に在住したイギリス人事業家だ。貿易を営む傍ら、鳥類の採集研究に努め、動物学的見地から北海道を日本の一部ではなく北東アジア（大陸）の一部とする「ブラキストン線」を1880（明治13）年に提唱した。しかしその存在と偉大な功績は意外にもあまり知られていない。ブラキストンとはいったいどんな人物だったのか。彼の実像を探るべく、北海道・函館を訪れた——

文●芦原 伸（ノンフィクション作家）撮影／戸川 覚



函館山の山頂にある「ブラキストンの碑」。津軽海峡を見下ろすように建っている。黒御影石と白御影石を組み合わせてつくられた碑にはブラキストンのブロンズ像がはめこまれ、その名が刻まれている

謎の男、ブラキストン

北海道新幹線が開業した。

〝黒船以来の興奮〟と地元紙が新幹線到来の興奮ぶりを伝えた、という。

そのせいだろうか、函館駅は近代的な美術館のような建物に変わっており、町並みはすっきりしていて名物だったイカの匂いはない。

駅前の朝市に足を向けた。

観光客が三々五々連れ立って歩いているが、聞こえてくる言葉は中国語や韓国語ばかり。〝市民の台所〟と呼ばれていたのはいつのことだったか、すっかり国際テーマパークと化していた。

函館市民は朝獲れのイカしか食べないという。何とも贅沢な町である。朝食の定番は納豆ではなく、イカ刺しである。旅館に泊まれば、イカ刺しと牛乳が食膳に上る。

函館は坂の町だ。

港を見下ろす函館山（旧臥牛山）の緩い稜線に沿って、葉脈のように道が山麓へ延びている。そのひとつ、大三坂をのぼると、ハリストス教会が見えてくる。函館のシンボルともいうべきロシア正教会の白い聖堂だ。

この地にニコライ司祭がやってきたのは、１８６１（文久元）年夏のことだった。東京お茶の水のニコライ堂で有名となった人である。

59（安政6）年の開港以来、函館には外国船が入ってきた。未知なる日本は列強にとっては魅力だった。アメリカは捕鯨、イギリスは貿易、ロシアは軍事とそれぞれの野望が極東の港に渦巻いた。

――目に触れる総てのものが珍しい。背後よりそびえる魏峨たる山（臥牛山）も館内から眺める湾内の風景も、家も人も総てが珍しい。商人と武士の区別も解かってくる。役人と浪人の相違も解かってくる。総じて、函館で感じた日本と日本人とは、開花した、礼儀のある国と人民であるということであった。

（『ニコライの日記』中村健之介編訳、岩波文庫より）

ニコライは25歳から33歳の青年期を函館で過ごした。怒涛のような幕末、明治維新であったが、彼は日本人を尊敬し、文化の高い国民として捉えている。

ハリストス教会の周辺は元町と呼ばれ、カソリック教会や瀟洒な洋館が点在している。開港直後、幕府は港近くに外国人居留地を指定したが、領事や貿易商人たちはそこを好まず見晴らしの良い坂上に居住した。

津軽海峡フェリー「大函丸（だいかんまる）」に乗船し、函館（北海道）から大間（青森）へ渡る途中、函館山の南端部に大鼻岬（おおはなさき）が姿を表した。断崖絶壁の頂上は雲の中に隠れている

ADVERTISEMENT & EDITORIAL TEMJIN PUBLICATION ADMINISTRATION
POSTED CERTIFICATE
SINRA
Approved by 天夢人

POSTED CERTIFICATE
SINRA
ADVERTISEMENT & EDITORIAL TEMJIN PUBLICATION ADMINISTRATION
一天夢人

『異国船入津絵巻』の中に描かれた、日本初・蒸気動力によるブラキストン製材工場全景（左）および内部（中央・右）の様子（若山徳次郎氏蔵）

ブラキストンは今流にいえば熱烈なバードウォッチャーであった

函館の老舗レストラン・五島軒本店が所蔵する『異国船入津絵巻』は普段見ることのできない貴重な歴史資料で、長さは約10mある

函館山にロープウエイで登る。

函館山は標高334メートルしかないが、町のどこからでも眺められ、方向案内にも役立っている。もともとは離島だったが、亀田半島と繋がり、また長らく軍事基地として立ち入りが禁止されたため、本来の植生が保たれ、自然の宝庫となっている。

山頂に立つと眼下に函館市街が開ける。市街地は島と半島を結ぶ砂州の上に築かれた。

そう思うと斧の柄のような形の市街地は平坦で五稜郭や湯川温泉が手に取るようだ。遠くには残雪の駒ヶ岳や渡島半島の山々がぽっかりと浮かぶ。

反対側は海が開け、眼下に津軽海峡が広がった。

その津軽海峡を背にブラキストンの記念碑が立っていた。

「ブラキストン・ライン」という言葉を読者はご存知だろうか？　団塊世代は小学校の教科書で学んだはずである。

津軽海峡の上に引かれた動物分布の境界線を著している。

北海道には本州に生息する固有の動物が生息しておらず、逆に北海道には本州にはいない固有種が生息している。サルとヒグマが象徴的だ。

左／かつて函館汐見町にあったブラキストン故宅の写真（明治44年写）。白ペンキ塗りで屋根は青かったという。現在、建物は残っていない　中／来日当時のブラキストン　右／晩年のブラキストン。横を向いているのは左頬に火傷の痕があったためとされている（3点とも函館市立中央図書館蔵）

ブラキストンは動物相の境界線が津軽海峡にあることを立証した。

ブラキストン・ラインは知っていても、ブラキストンとはいかなる人物だったのか、というと、誰もが明快な人物像が出てこない。

幕末に日本に来て、函館に23年間を過ごしたイギリス人であったこと。戊辰戦争の折、軍艦や武器調達などをして稼いだこと。長崎のグラバーもそうであったように、この人物にも多少のキナ臭さがまとわりつくが、とにかく貿易商として成功し、富豪となった。一方で、当時では稀な狩猟家であり、無許可で内陸の地形や海岸線を遊歩する探検家でもあった。そこでスパイ説が持ち上がったという謎の人物であった。

世界のすべてを知りたい

トーマス・ライト・ブラキストンは1832（天保33）年、イギリスのハンプシャー州の田舎町で生まれた。父親ジョンは元陸軍少佐。准男爵家（バロネット）という貴族の家系である。

14歳でロンドンにある王立陸軍士官学校へ。卒業後、英国近衛砲兵隊に配属され、クリミヤ戦争に出兵。かの有名なセヴァストーポリ攻防戦で功績を立て、大尉（キャプテン）に昇進した。

幼いころから博物学者に夢を抱き、とくに鳥類に強い興味をもち、戦線の中でも暇を見つけては鳥類採集にでかけたというから相当の趣味者だった。帰国してから「クリミヤ半島に於ける風土と動物学」（研究論文）を英国王立地理学協会に寄稿している。当時は鳥類観察というジャンルはなかったから、今流にいえば熱烈なバードウォッチャーであった。

進化論にも興味を抱き、『種の起源』のチャールズ・ダーウィンを訪ね、弟子入りを申し出たが相手にされなかった。自然淘汰、適者生存という進化論はキリスト教が支配する世論では〝危険思想〟と見なされていた。そういう意味では、ブラキストンは先取精神にあふれた科学者の片鱗をうかがわせる。

そんなある日、北アメリカ学術探検隊（ポーリサー探検隊）への参加が決まり英国領カナダに遠征する。地磁気（磁極と北極点のズレ）の観測が目的で、カナディアンロッキーの無人地帯に分け入った。きっと軍事よりもこうした探検の方が好きだったのだ

右上／ブラキストン愛用の二連発銃（ロンドン製）　右下／長く伸びる望遠鏡　左／当時の面影を残すブラキストンの机。高さはやや低めで、左側面部には引出しがついている（3点とも市立函館博物館蔵）

TOP